

研究便り No. 51

令和2年度 研究の概要

発刊にあたって	1
これまでの研究の経緯	1～2
研究大会を終えての成果と課題	2
次期研究に向けての取り組み	2～3
教科等の研究実践	4～8
総合学習シャトル 総合学習 CAN	9～11
研究文化の創造	12
あとがき	12

香川大学教育学部附属坂出中学校

発刊

令和3年3月3日

発刊にあたって

校長 平 篤志

早春の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申しあげます。

本校では、長年にわたり、「ものがたり」¹をキーワードとして、教員一同「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ試みに取り組んできました。「ものがたり」とは、当事者の語りを通して、よりその人に合った問題の解決法を見出そうとする Narrative approach の核をなすものです。

本校では、この「ものがたり」がもつ力を授業に活かすことを通じて、生涯にわたって学び続けようとする強い意志をもった生徒を育成することをめざし、さまざまな取り組みを行ってきました。本年度の教育研究発表会は、これまでの試みをさらに深め、「自己に引きつけた語り」を生みだす授業を構築することをテーマとしました。このテーマに迫るために、単元構成の仕方や、問い合わせの立て方、学びの振り返り方、教師の関わり方などを検討してきました。しかし、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大のため、残念ながら発表会自体はとりやめ、誌上発表という形を取るに至りました。

一方で、平成30年度より、文部科学省研究開発学校の指定を受け、生徒自らが主体的に課題を設定し、解決しようとする異学年合同による共創型探究学習(総合学習 CAN)の研究開発を続けてきました。今後は、これまでの実績を活かし、さらに進化した総合学習 CAN をめざしていきます。

本号の研究便りでは、次の教育研究発表会を見据えながら、学習に関する多様な研究テーマ、授業における実践と評価のあり方、学習を支える学校環境・学校文化づくりなどの観点から、各教科・領域ごとの研究内容を掲載しました。分析方法・分析内容に至らぬ点もあるうかと存じますが、忌憚のないご意見をお聞かせ頂けましたら幸いです。最後に、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申しあげます。

研究主題

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

—語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案—

(第一次終了)

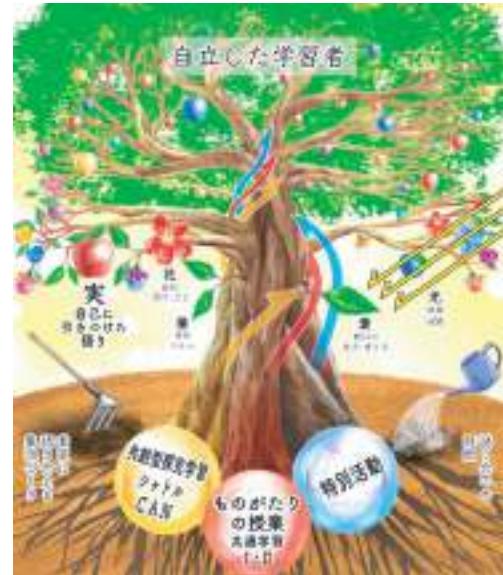
1 これまでの研究の経緯

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に授業実践及びカリキュラムの研究を進めてきた。平成26年度大会からは、ナラティヴ・アプローチ²としての「語り」の研究を継続しつつ、個々の学習者の学びの文脈に沿う

¹ 「語る」行為と「語られたもの」の両方を含む概念。特に、教育活動の中で、生徒が「語る」ことを通じて学びの意味や価値を実感し、自己を形成していくことを重視する点で、2013年より本校独自に「ものがたり」とひらがなで表記している。

² ナラティヴ(語り、物語)という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。(野口裕二『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009) 本校は、振り返りを語りの視点から捉え直す自己理解法ととらえている。

学習指導法を「自己物語³」の視点から追究する「ものがたり」の授業を提案した。28年度研究発表会では、学習者の個の文脈を意識した単元構成と問い合わせを設定し、互いにクリティカルに聞き合い問う中で新たな「ものがたり」を語り直す「個が響き合う共同体⁴」を提案した。30年度は、「深い学びを生み出すための問い合わせのあり方」、「聞き手を育てる教師のかかわり方」を通して構築される「主体×主体の関係⁵」が、「ものがたり」の授業における深い学び⁶を生み出すことを提案した。今年度は、前回までの研究を継承しつつ、図1の研究構想図に示すようにカリキュラム全体を通して「自己に引きつけた語り⁷」を生み出す実践を行っていくことで、生徒の学ぶことの意味や価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける生徒を育成することを提案した。



【図1 研究構想図】

2 研究発表会を終えての成果と課題

今年度の研究発表会は、新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、誌上発表という形を取るに至ったため、実践を通して表出された具体的な生徒の「語り」や生徒アンケートをもとに、成果と課題を確認した。具体的な内容は、以下の通りである。

(1) 成果

○学んだことと自己とを関連づけることは、生徒の学ぶ意味や価値の実感には、一定の成果はあったと考える。

○異なる考えでも自分の意見を述べること、根拠に基づいて語ること、疑問に思った点について問うことの意識が生徒の中で高まっており、語り合い、探究することへの意識の高まりが伺えた。

(2) 課題

●多くの授業において単元学習前後で、題材に対する「ものがたり」の変容は見られるものの、それが果たして学んだことの意味や価値の実感、さらには未来につながる自己のよりよい生き方を見いだしていくことにつながっているのか。学んだことと自己とをつなぐためのさらなる授業づくりが必要である。

●学んだことから「自己に引きつけた語り」を生み出すための振り返りの手立ての工夫。

●根拠に基づいて問い合わせ探究する学びの集団づくりやその仕掛け。

3 次期研究に向けての取り組み

前回までの研究を継承しつつ、「ものがたりの授業」を通して、生徒が学んだことの意味や価値を実感できる授業を引き続き追究していく。今期は、研究発表会の成果と課題を踏まえ、「生徒の自

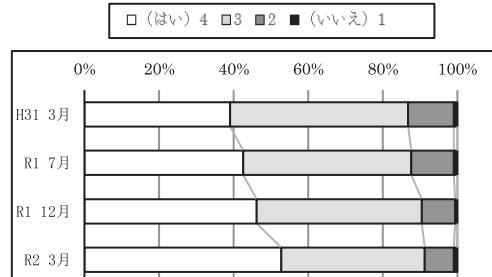
3 「自分自身について語る」ことを通して自己の生成と変容を理解すること。

4 「個が響き合う」とは、生徒が主体となり互いの学びの声が活かされている状態を意味している。また「共同体」とは、個がそれぞれの学びの主体となり、積極的に仲間とかかわる中で、新たな「ものがたり」を生み出していける、言わば「ものがたり」の深化をはかるための集団である。

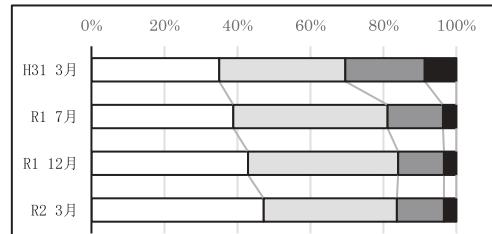
5 自らの意志に基づいて「人・もの・こと」にかかわろうとする学習者同士が、対等な立場で、他者を受容しながら聞き合い、語り合う関係

6 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。(文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』、2017、77頁)

7 「語り」の中でも、特に出来事と自己との関連を見つめ、それを筋立てて、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。



【図2 学んだことから意味を見出したり、価値を実感したりする】



【図3 周りと異なる意見や考えでも安心して発言できる】

己形成につながる『自己に引きつけた語り』をどのように生み出していくか』を大きなテーマとし、「自分自身や自分をとりまく世界の見え方、感じ方の変容」と「語り合い、探究する学びの過程」という視点を特に重視して以下に示す「ものがたりの授業」の定義をもとに実践に取り組んでいる。

★ 「ものがたりの授業」

「ものがたり」の考え方を取り入れた授業のこと。他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、学ぶことの意味や価値を実感し、未来につながる自己のよりよい生き方を見いだしていく。

(1) 自分自身や自分をとりまく世界の見え方、感じ方の変容について

林竹二（1987）⁸は、「学ぶということは、覚えこむこととは全くちがうことだ。学ぶことは、いつでも何かがはじまることで、終わることのない課程に一歩ふみこむことである。一片の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないか。学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである。（中略）学問の場合、ものを見る見方・考え方方が変わり、生き方が変わることです。そして見方が変われば、それに応じて世界そのものが変わってくる。」と述べている。すなわち、学んだことによる新たな知識の獲得だけでなく、それが自分とつながり、自分自身を変えていくものにならなければ、人は学ぶことの意味や価値を実感できないと言える。そこで、授業者として何を重視すべきか。「ものがたり」の授業を構想する中で、以下の3点に着目して、授業研究を行っている。

- ① 授業を通して、生徒にどのように変容して欲しいのか。（教師の願い）
- ② その題材（教科）を学ぶ意義は何なのか。（教科の本質を踏まえた、その教科を学ぶ意義）
- ③ その題材を学ぶことが、生徒の生き方にどのようにつながっているのか。

(2) 語り合い、探究する学びの過程について

「自己に引きつけた語り」を生み出すためには、自ら課題に向き合い、思考を巡らせ、自己や他者に問い合わせ、挑戦や失敗を繰り返しながら、学んだことを自分のものにしていく生徒主体の学びについていくことが大切であると考えている。そういった生徒主体の学びにするために、前回の発表会から、本校で重視しているのが、語り合い、探究する学びの過程である。生徒は「語る」ことによって、自分の中に知識を構成していく⁹。そして、その知識を構成する筋立てに個人性が生まれる。語り手によって構成された知識を、異なる筋立ての他者と問い合わせ、語り合うことで、互いに再構成していく¹⁰。つまり、語り合うことで生徒は学びを深め、自分のものとしていくことができる。また、語り合うことは、探究する学びの過程として行われることが重要である。なぜなら、語り合うこと自体が目的化してしまうと、生徒同士のすり合い（吟味する、最適解を導く、合意形成する、など）が行われにくく、学びが深まらないからである。そこで、今期は、各教科における探究する学びを以下の3点に着目して、授業研究を行っている。

- ① 課題（問い合わせ）が生徒のものになっていること
- ② 課題追究の方法が生徒のものになっていること
- ③ 根拠にもとづいて語り合い、問い合わせること

生涯にわたって学び続ける生徒を育成することは、たやすいことではない。ただ、「ものがたりの授業」には、その可能性を感じている。なぜなら、「ものがたりの授業」を通して学ぶことの意味や価値を実感する生徒たちがいるからである。学んだことから、自己の「ものがたり」を絶えず更新し成長している。「ものがたりの授業」の具現化に向けて、さらなる研究実践を進めていく。

8 「生きること学ぶこと」林 竹二, 1987, 筑摩書房, pp142-143

9 社会構成主義の学習観にもとづく。社会構成主義では、現実の社会現象や、社会に存在する事実や実態、意味とは、すべて人々の頭の中で作り上げられたものであり、それを離れては存在しないとする。そして、学習とは、外から来る知識の受容と蓄積ではなく、学習者自らの中に知識を精緻化し（再）構築する過程であるとする。

10 「ものがたり」は、語り手と聴き手の共同行為によって生まれ、語り合うことによって絶えず再構成される。（本校『研究紀要』2014、2016、2018より）